

# I 研究テーマについて

## 1 研究テーマ

『自立に向かう子どもたち』

— 人やものとかかわることを大切に —

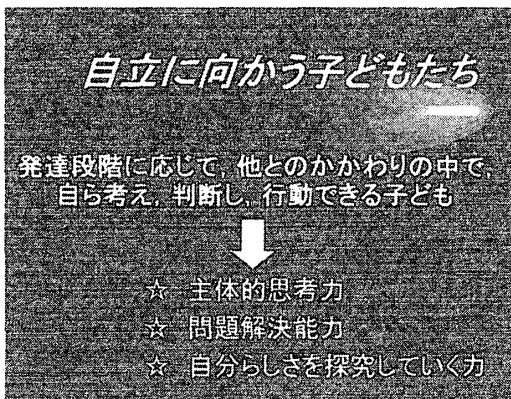
## 2 研究の経緯

### (1) 研究テーマ誕生

「自己教育力」「豊かな感性」と研究を進めてきた本校では、現実の子どもたちを見つめた時学習を含めた子どもの暮らし全体に視野を広げることが必要であると考えました。そこで、平成8年の夏、「子どもの暮らしや生活」を次の観点で見直してみたいのです。

- ・生活リズムとゆとり
- ・学校行事と宿泊学習
- ・教科の枠にとらわれない、本校の子どもに必要なもの

その中で、子どもたちの現在の課題、今後、身につけてほしい資質や能力について検討した結果、浮かび上がってきたのが「自立」というキーワードです。



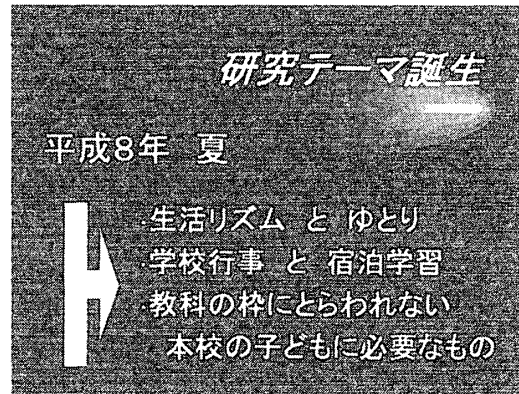
考えています。

### (2) サブテーマ「自分で決める場を大切に」(H9～H11)をふりかえて

子どもたちの「自立」に向けて、平成9年度から3年間「自分で決める場を大切に」をサブテーマとして取り組んできました。

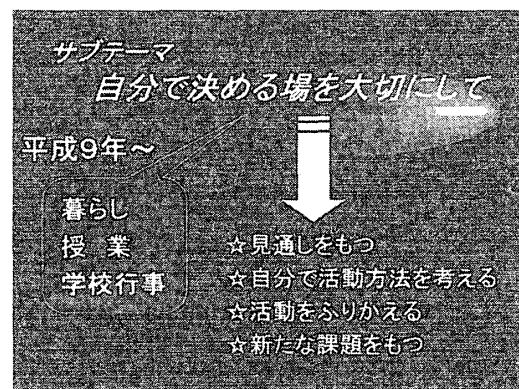
このサブテーマのもと、子どもたちの日々の暮らし・授業・学校行事などを通して、まず、自分で決めることを大切にしてきました。その結果、子どもたちの姿からは、見通しをもち、自分で活動方法を考え出し、活動をふりかえり、新たな課題をもつという意識や態度が見られるようになってきました。

自分で決めるのも、追究するのも、ふりかえるのも、さまざまなかかわりの中で行われてき



こうして、子どもの実態を見直すことにより生まれてきたのが、研究テーマ「自立に向かう子どもたち」なのです。

めざす子ども像を、「発達段階に応じて、他とのかかわりの中で、自ら考え、判断し、行動できる子ども」とし、平成9年度から実践に取り組んできました。この子ども像を追究することにより、主体的思考力や問題解決能力、かかわりの中で自分に自信をもち自分らしさを探究していく力が子どもたちに身についていくものと



たはずです。なぜなら、人間は一人で生きているのではありません。自分を取り巻くさまざまな人やものの中で生きているからです。

しかし、子どもたちは、自分の活動に没頭するあまり、他者の考えやよさに目が向きにくくなったり、お互いが影響を及ぼし合いながら高まり合っていることに気づかなかったりすることもありました。

これは、人やものとかかわることを十分保障できていなかったり、子ども自身にどのようにかかわればよいのかがよく伝わってなかったりしたためだと考えられます。

また、年間行事を見直したとき、子どもの暮らしにゆとりを求めて「3学期制」から「2学期制」へと移行しました。1年間を通した学校行事の適切な配置を、子どもの生活リズムから検討した結果からです。

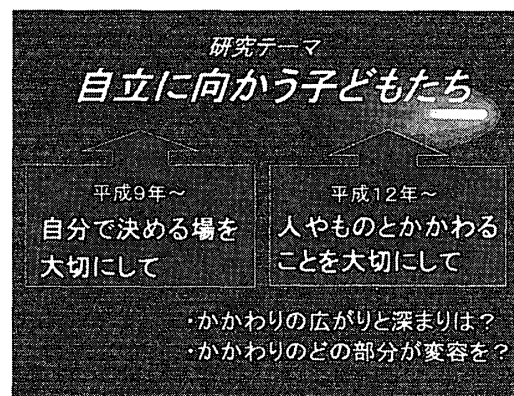
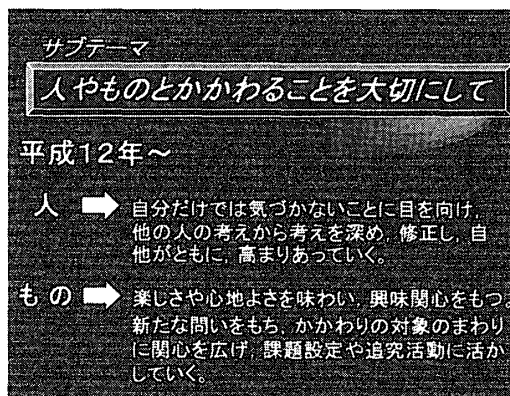
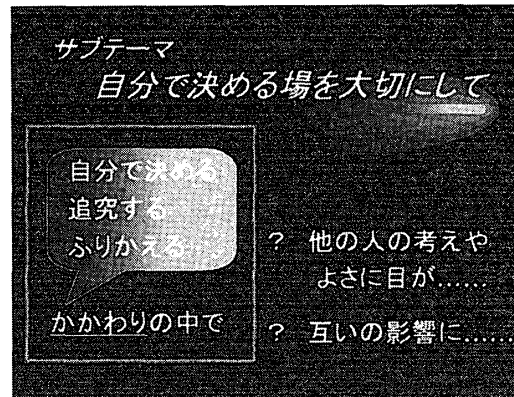
### (3) サブテーマ「人やものとかかわることを大切にして」(H12～)の設定

3年間のふりかえりから、これまで自己決定の中で行われてきた人やものとかかわりを、より大切にしていきたいと考えました。

人とかかわり合うことで、自分だけでは気づかないことに目を向けたり、他者の考えを参考にしながら自分の考えを深めたり、修正したりしながら、自他ともに高まり合っていくことができます。

また、これまで自己決定によって芽生えてきた個人の意欲や関心、主体的に思考する態度や問題解決能力などを、より高めていくことにもなります。そして、その力が集団の中で生かされ、認められることで、子どもは自分に自信をもち、他者のすばらしさを認め、それぞれが自分らしさを追究していくようになるでしょう。

ものとかかわり合うことで、自分の五感を働かせ、楽しさや心地よさを味わったり、興味や関心をもったりすることができます。そして、これまでの自分の知識や経験からは考えることのできないものと出会ったとき、新たな問いをもつことにもなります。さらに、かかわったものを通してその回りのものや出来事にも興味や関心を広げ、自分の課題設定や追究活動に生かしていくことができると考えました。



そこで、「人やものとかかわることを大切にして」を切り込み口とし、これまでの計画や実践を見直しながら、研究を深めていくこととしました。かかわりが、子どもたちの全ての活動を、広く豊かにしていく土台になると考えたのです。

### (4) 昨年度をふりかえって

昨年度の取り組みをふりかえってみると、人やものとかかわりを意識して学習や活動

に取り入れてきたことで、自分から分からないことを調べよう、人の考えを取り入れて自分の考えを練り上げようとする子どもたちの姿が見えてくるようになりました。

一方、課題としては、かかわりの広がりや深まりをどのように見とっていくのか、かかわりのどの部分によって、子どもたちが変容したのかを明らかにしていくこと。が挙げられます。

そこで、本年度は、次の表をもとに、「見通し」「追究」「ふりかえり」の各段階で、子どもたちのどのような姿が見えたとき、子どもたちにどのような力がついたらと考えられるのかを、より具体的に探っていくこととしました。

|                       | 態 度  | 能 力  |
|-----------------------|--|--|
| 見<br>通<br>し           | 自分から取り組もうとする態度   | 問題を見つける力<br>めあてをもつ力<br>計画を立てる力                         |
| 追<br>究                | 自分から働きかけようとする態度<br>最後までやりとげようとする態度                         | 方法を考える力<br>判断する力<br>行動する力<br>まとめる力                     |
| え<br>り<br>か<br>ふ<br>り | 自分を見つめようとする態度<br>次へ生かそうとする態度                               | 次へ生かす力<br>自分のよさに気づく力<br>新たなめあてを生み出す力                   |
| ↑ ↑                   |  | ↑ ↑  |
| か<br>か<br>わ<br>り      | 相手(対象)を感じ取り受けとめよう<br>とする態度<br>理解しようとする態度<br>自分からかかわろうとする態度 | 人の話を聞く力<br>同じ所や違いに目を向ける力<br>比べたり深めたりする力<br>思いや考えを表現する力 |

### 3 本年度の取り組み

「日々の暮らし」「教科・領域の授業」「学校行事・宿泊学習」「総合的な学習」の大きく4つの場面から、子どもたちの変容を探りつつ、テーマの実現に向けて取り組んできました。

#### (1) 日々の暮らし

子どもたちが自立に向かうためには、学習したことを生活の中に生かし、生活の中からも学習していくことが必要です。そこで、子どもたちの日々の暮らしの基盤となっている学級・学年経営を大切に、実践に取り組むこととしました。

日々の積み重ねやわずかな子どもの変化をも大切にしていけるように、朝の会や給食の時間などを校内研修に取り入れ、その度ごとに、子どもたちの自立に向けての支援のあり方について意見交換をしてきました。

また、活動の集団にも目を向け、複数学年や縦割り、全校活動など異年齢による活動を

通して、子どもたちの「かかわる力」を育んできました。自分たちのために計画し、実践する力がついてきたと共に、互いの意見を尊重する態度が見られるようになってきました。

さらに、意図的な環境が子どもたちを伸ばすという考えから、校内の環境づくりにも目を向けてきました。子どもを育てようとする掲示とはどのようなものかを、各教室の掲示を見て回ることにより探っていき、より質の高い環境づくりに努めてきました。

## (2) 教科・領域の授業

授業においては、教科や単元、さらには学習場面によって「人やものとかかわること」はいろいろな形をとるものと思われまます。どのような形であれ、かかわることによって、子どもたちは、自分で決めたことや自分の追究をより広く見つめ直し、自分自身をより深くふりかえる。そんな姿が期待できます。そして、他者とのよりよいかかわり合い方を模索しながら、共に高まっていくことでしょう。

本年度も、各教科・領域における「基本的な考え」を出し合い、日々の様子から子どもの姿を見とり、子どもと共に日々の授業を創り上げ、実践を積み重ねています。

校内研修においては、授業記録を取るだけでなく、参観者全員が短冊カードに気づきを記入し、分析を行っています。その際の参観の観点は、「子どもの様子」「教師の働きかけ」「研究テーマに沿った気づき」「授業全体の雰囲気」などです。1時間の授業から、これまでの取り組みの様子や成果と課題、日々の授業への姿勢を研修してきました。

また、大学の先生から助言をいただくことにより、専門的な立場からの指摘も受けています。

このような積み重ねが、子どもの姿を「めざす子ども像」へと近づけていくものと考えています。

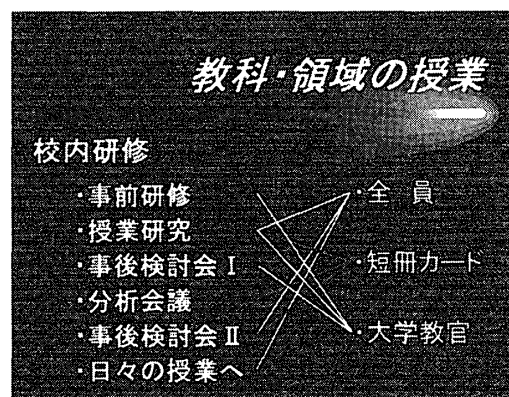
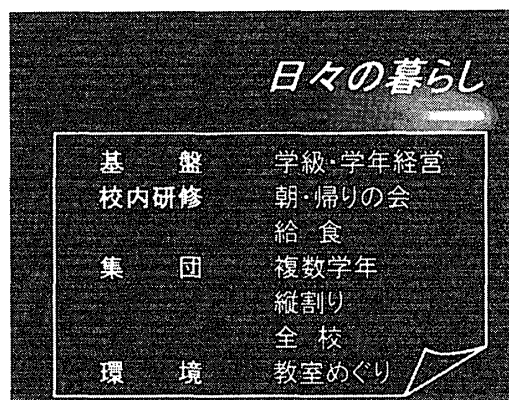
## (3) 学校行事・宿泊学習

子どものくらしを見直し、子どものくらしとのバランスを考慮しながら総合的に考えて平成9年度から2学期制を進めてきました。当初のねらい通り、ゆとりのある行事や学習になっているか、子どもたちが自分たちの力で活動を創り上げているかなどについて検討を重ね、今年の子どもたちに合った内容となるように修正し実施しています。

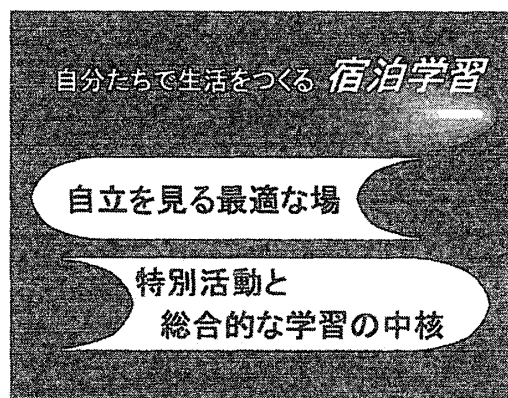
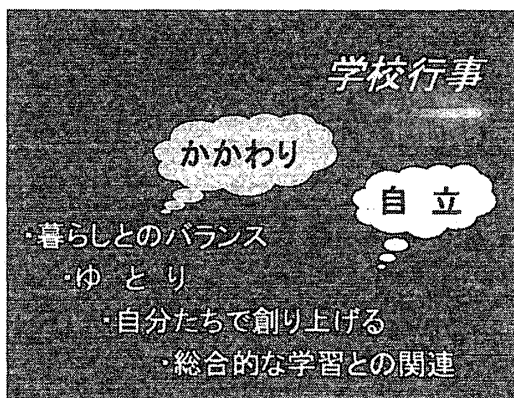
あわせて総合的な学習との関連も図っています。「人やものとかかわり」を大切にしていくな絶好の機会が学校行事にはあります。それは、「自立」に直結していると言っても過言ではありません。

宿泊学習は、子どもの自立を見るのに最適な場です。「自分たちで生活をつくること」をねらいとし、子ども一人一人の活動の様子からこれまでの取り組みをふりかえる。子どもたちは今どのあたりまで力をつけ、これからどのような手だてが必要なのかが目の当たりに見えてくるのです。

活動場所、時期、内容などについて、より効果的な宿泊学習を求めて継続して実施していこうと考えています。昨年度より3年生以上で1学年1宿泊学習としたことに、大きな



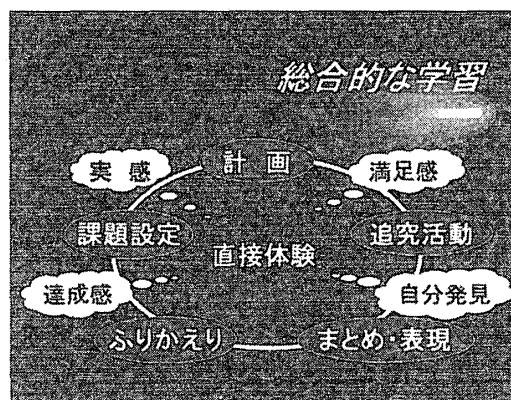
意味を持たせるためにも重要な活動であり、本校の特別活動と総合的な学習の中核を担う学習となっています。



#### (4) 総合的な学習

総合的な学習においては、何よりも「直接体験」を重視してきました。体全体を通しての丸ごと体験は、実感、満足感、達成感、自分発見など、子どもたちが自立に向かっていくために大変重要なものを与えてくれると考えるからです。それらは、子どもたちの人間形成にも深く影響を及ぼし、個性をも目覚めさせてくれます。また、抽象的な思考を育む上での土台となると共に、考えたことの検証の場にもなるのです。そして、子どもたちが、課題設定から追究活動へと進むときも、方向性と共に意欲も喚起してくれます。そのため、本校では、体験を重視しながらも体験のみに終わることのないよう、体験をふりかえり、体験で得たものを焦点化し、追究課題へと実らせる過程を大切にしています。

本校の考える「直接体験」を中核とした、基本的な学習の流れは図のようになります。



総合的な学習を進めるために、「人間」「環境」「自分タイム」「コンピュータ活用」の4領域を設定し、年間活動計画を作成して取り組んできました。

かかわりの対象としての「人間」「環境」。そこから自分自身を見つめ、自分の生き方について考え、よりよく生きていく姿をめざすものです。「自分タイム」は、自分の興味関心の追究を通して、学びの姿に気づき、新しい自分との出会いをめざすものです。この3領域が、本校の総合的な学習の両輪となっています。「コンピュータ活用」は、主に情報収集、発信の手段として、様々な活動を支えるものとして機能しています。

来年度からは、本校の子どもたちにとってよりよい活動・時間にするため、領域の再編成をすることとしました。

##### ① 教科・領域との関連

総合的な学習と教科、特別活動、道徳との内容の関連について整理し、本校の考える総合的な学習の位置づけを明らかにしてきました。

どの教科・領域においても「めざす子ども像」に変わりはありません。研究テーマ「自立に向かう子ども」をめざして、教科、領域、総合的な学習のそれぞれの特性を生かした活動を展開していくという立場から話し合いました。

《特別活動》

- ・ 集団活動
- ・ 集団としての自覚
- ・ 自主的、実践的態度

《道徳》

- ・ 道徳的心情
- ・ 価値
- ・ 道徳的実践力

《総合的な学習》

- ・ かかわる
- ・ 自分で決める
- ・ 自分自身を高め、伸ばす、ふりかえる

子どもたちの実態に応じてそれぞれの活動が展開されること、結果ではなく過程を重視していくことなど大きな共通点もあります。

本校の総合的な学習は、子どもたちにとって望ましいと思われる活動を仕組む上で、既存の教科や領域の枠を取り外して創り出したものです。子どもたちがより主体的に活動をしていくことができるように、実践を積み重ねながら、教科・領域との関連について内容やねらいから見直しを図っていくこととしました。

② 年間活動計画の作成

総合的な学習を進めるために、「人間」「環境」「自分タイム」「コンピュータ活用」の4領域を設定しました。そして、各領域の基本的な考えやねらいを検討し、年間活動計画を作成してきました。

今年度も、サブテーマに照らして各領域の基本的な考え方を見直し、単式用、複式用、養護学級用のすべての学級を網羅した年間活動計画を作成しました。作成にあたっては、各学年部で昨年度の活動や支援などの情報交換をしながら、今年度の子どもたちに合った計画になるように修正を加えていきます。また、教科・領域と総合的な学習とのバランスや、行事との関連も図っていきます。

③ 授業時数について

- ・ ゆとりの時間と火曜日の学級裁量の時間を活用し、週2時間、1年間を35週として考えると70時間となりますが、新教育課程に移行するまでは、行事の関連から年間の総時数を60時間とします。
- ・ 総合各領域への配当時間は、下記の表に示す時間数を基本とし、各学年に任せます。
- ・ 低学年の総合的な学習は、コンピュータ活用のみ、年間15時間をあてます。

|     | 人 間 | 環 境 | 自分タイム | コンピュータ活用 |
|-----|-----|-----|-------|----------|
| 低学年 | ／   | ／   | ／     | 15       |
| 中学年 | 15  | 15  | 15    | 15       |
| 高学年 | 10  | 10  | 28    | 12       |

\* 障害児教育の時数については、別途計画する。 (単位：時間)

④ 学習環境整備

総合的な学習が、子ども主体の活動になり、より子どもの思いに応えるものとなるよう、引き続き次の学習環境整備を行いました。

○ 人的環境整備

学校は、子どもたちにとってかけがえのない「生活の場」です。ここで出会う人々が、最も大きな学習環境となるのです。そこで、子どもたちが、ごく自然に周囲の人々とかかわりをもてるように、そしてかかわりを広げていけるように、学校を基点とした人的環境を整備していきます。

- ・担任，専科，保護者などによるネットワーク体制づくり

○ 物的環境整備

子どもたちが、自分から進んで活動をしていくとき、その場で追究や判断の材料となるさまざまな情報を得ることが必要となります。いつでも何回でもそこで情報を得ることができ、しかも気軽に身近な体験の場となるように、整備していきます。

- ・図書室，特別教室の整備充実
- ・インターネット整備
- ・体験場所，公共施設に関する資料整備

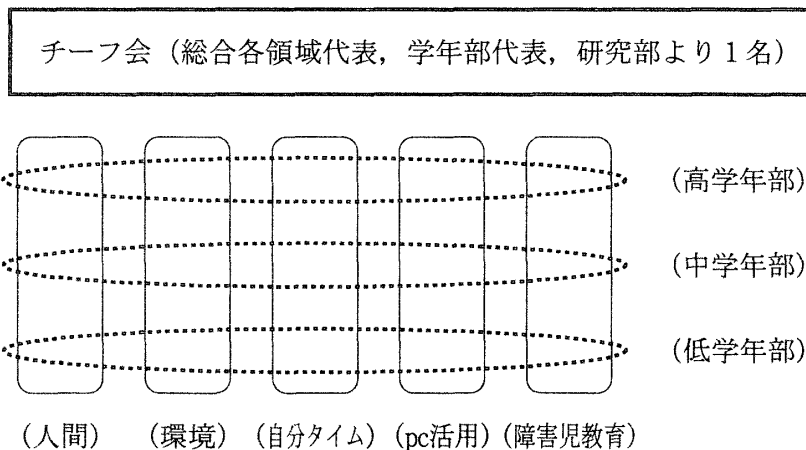
○ 場の整備

自分たちの活動をふりかえり、その活動を広めたり次への意欲を高めたりするために大切なのが、場の設定です。全校が、かかわり合える場を適宜工夫しながら設けていきます。

- ・発表，展示会
- ・掲示板，放送などの利用

⑤ 研究推進組織

取り組みを充実したものにするために、以下のような組織で研究を推進してきました。



<チーフ会>

- ・総合的な学習と教科，道徳，特別活動との関連についての見直し
- ・総合的な学習のねらいの検討
- ・総合各領域間，各学年部間の調整

<学年部会>

- ・総合各領域配当時間の検討，年間活動計画の作成
- ・基本的な学習のねらいにおける手立てと支援のあり方の明確化
- ・環境整備のための希望や要求のまとめ

<総合領域プロジェクト>

- ・総合的な学習と教科，道徳，特別活動との関連についての再検討
- ・総合各領域のねらいと各学年部のねらいの調整
- ・基本的な学習の流れにおける手立てと支援のあり方の明確化

・全体のねらいと各学年の内容の検討

#### 4 成果と課題

##### (1) 子どもの姿から

これまでの取り組みを通して、子どもの姿はようになってきたのか。どのような力が見られるようになり、どのような態度がとられるようになってきたのか。次のような表を用いて、低学年、中学年、高学年ごとにふりかえてみました。○が成果として見られる点、△が課題として残っている点です。

「見通し」の段階では、自分のやりたい活動を選択したり、既習の活動をもとに計画を立てたりする力がついてきました。これからは、いくつもアイデアを考えたり、完成やゴールのイメージを持って活動に取り組んでいけるような力をつけていきたいと考えています。

「追究」の段階では、情報を収集したり、人とは違う工夫をして取り組んだりする姿が多く見られるようになってきました。また、友だちのよいところを取り入れて、自分の活動に活かしたり、自分の頑張りに目を向けたりすることができるようにもなってきました。物事を関連的にとらえ、多くのデータから必要なものを適切に処理していくことができるようになれば、より質の高い「追究」になっていくものと思われま

| 見 通 し               | 低 | 中 | 高 |
|---------------------|---|---|---|
| 自分から進んで行動を起こす       | △ | ○ | ○ |
| 自分のやりたい活動を選択できる     | ○ | ○ | ○ |
| 実物を見てその特徴に気づく       | ○ | ○ | ○ |
| 活動のおらいや目標を明確にもつ     | △ | ○ | ○ |
| 完成・ゴールのイメージをもつ      | △ | ○ | △ |
| 自分で活動計画を立てる         | ○ | △ | ○ |
| 既習を取り入れた活動計画と工夫ができる | ○ | ○ | ○ |
| いくつもアイデアを考えて選択できる   | △ | △ | △ |

| 追 究 (方法)            | 低 | 中 | 高 |
|---------------------|---|---|---|
| 実物を見てその特徴に気づく       | ○ | ○ | ○ |
| 異なるいくつかの対象を、比較してみる  | △ | ○ | △ |
| 様々なメディアを使い、適切な情報を収集 | ○ | ○ | ○ |
| 物事を関連的にとらえ、感じ取る     | △ | △ | △ |

| 追 究 (まとめる)         | 低 | 中 | 高 |
|--------------------|---|---|---|
| カードやノートの整理ができる     | △ | ○ | △ |
| データを自分の課題に沿ってまとめる  | △ | △ | △ |
| 工夫や自分のがんばりを表現できる   | ○ | ○ | ○ |
| 友だちのよいところを自分に取り入れる | ○ | ○ | ○ |

| 追 究 (方法)           | 低 | 中 | 高 |
|--------------------|---|---|---|
| 異なるいくつかの対象を、比較してみる | △ | ○ | △ |
| 物事を関連的にとらえ、感じ取る    | △ | △ | △ |

| 追 究 (判断)          | 低 | 中 | 高 |
|-------------------|---|---|---|
| 与えられた時間で何ができるか考える | △ | △ | ○ |
| 多くのアイデアから適切なものを選択 | △ | △ | ○ |
| 多くのデータから正しいものを判断  | △ | △ | △ |

| 追 究 (行動)            | 低 | 中 | 高 |
|---------------------|---|---|---|
| 完成・ゴールのイメージを明確にして活動 | △ | ○ | △ |
| 多くの人や場所へ、必要な情報を求める  | ○ | ○ | △ |
| 人とは異なる工夫をして取り組む     | ○ | ○ | △ |

「ふりかえり」については、全学年において、おおむねめざすべき姿に近づいてきました。「ふりかえり」が次の活動につながっていくよう、より大切に扱っていきたいと考えています。

| ふ り か え り              | 低 | 中 | 高 |
|------------------------|---|---|---|
| カードやノートを整理して残す         | △ | ○ | ○ |
| 自分の活動を評価カードなどで、評価できる   | ○ | ○ | ○ |
| 方法を変えて活動を発展させようと思う     | ○ | ○ | ○ |
| 既習を取り入れて次の活動を計画する      | ○ | ○ | ○ |
| 自分のがんばりやよさに気づく         | ○ | ○ | ○ |
| 人のよい点を、自分の活動に取り入れようとする | ○ | ○ | ○ |
| 協力者に感謝の言葉を言う           | ○ | ○ | ○ |



そして、「かかわり」の視点からは、友だちのよいところに気づいたり、友だちと自分の考え方や取り組みの違いに気づいたりすることができるようになってきました。これは、相手の話を聞き入れる、受け入れることができるようになってきた姿と言えるでしょう。

しかし、基本的な「相手を意識した表現」という意味で課題が残っています。声の大きさや適切な言葉遣いなどにも気をつけた、人に伝えるための表現が、その場に応じて、相手に応じて、できるようにしていく必要があります。

| かかわり                | 低 | 中 | 高 |
|---------------------|---|---|---|
| 友だちにアドバイスできる        | ○ | ○ | ○ |
| 自分の考えを伝える資料を作る      | ○ | ○ |   |
| 効果的な発表の計画ができる       |   | ○ | ○ |
| 見つけたことと考えたことを分けて考える |   | ○ | ○ |
| 友だちと自分の記録を比べて違いに気づく | ○ | ○ | ○ |
| 自分の学習を友だちと比べながら判断する | ○ | △ | ○ |

| かかわり             | 低 | 中 | 高 |
|------------------|---|---|---|
| 自分の考えをはっきり言う     | △ | ○ | △ |
| 声の大きさを考え、はっきりと話す | △ | △ | △ |
| 適切な表現を使って協力を依頼する | △ | △ | △ |
| 適切な言葉遣いができる      | △ | △ | △ |
| 感謝の気持ちを表現する      | ○ | ○ | ○ |
| 人の考えをよく聞く        | △ | △ | △ |

今後は、まだ不十分だと判断された子どもの姿をどのようにしてめざすべき姿に近づけていくのか。また、これからも大切にしたい子どもの姿とはどんな姿なのか。新しく必要だと考えるめざすべき姿とはどんな姿なのか、合わせて研究を深めていきたいと思います。

## (2) 来年度に向けて

来年度から、新教育課程が実施されます。本校でも、これまでの取り組みをもとに、教育課程の編成を行いました。総合的な学習においては、これまでの4領域を、「人間」「環境」の2つの領域を合わせて「ふれあい」領域とし、3領域で編成し直しました。「コンピュータ活用」領域も「操作・技能」に焦点をあて、スリム化しています。

また、総合的な学習と特別活動との関連を図り、特に学校行事とからめた総合的な学習「ふれあい」を考えています。

日々の暮らしや授業も含め、来年度も、さらに「自立に向かう子どもたち」の姿を追い求めていきたいと考えています。

